

## ⑫ 湿地の植物

愛知県の丘陵地は、東海層群と呼ばれる粘土と礫の互層からできています。全体的に見れば乾燥したやせ山ですが、礫層は水を通しやすく粘土層は水を通さないで、地層の切れ目から地下水が湧き出し、ところどころ小規模な湿地ができます。このような湿地を湧水湿地といいます。湧水湿地の水は雨水がそのまま湧き出したようなもので、肥料分をほとんど含んでいません。また、湿地を涵養する水は常に流れていて、そのため腐植質もたまりません。極めて貧栄養で、植物が生育するにはとても厳しい場所ですが、それだけに他の場所ではより旺盛に育つ他の植物に押されて消えてしまうような植物がいろいろ生育しており、その中には多くの絶滅危惧種も含まれています。この地域の自然の中では最も重要な要素の一つで、保全活動の対象地としてもしばしば取り上げられています。

湧水湿地は、地滑りなどにより新たに形成される一方で遷移の進行により森林に戻り、この地域の自然の中で全体として生成と消滅を繰り返してきたと思われる。湿地に生育する植物も、そのような湿地を渡り歩きながら、この地で命脈を保ってきたと思われる。ところが治山事業の進行に伴い、土地の崩壊などが起きる機会が著しく減少し、たまたま起きても、その場所ではすぐ復旧工事が行われるようになりました。新しい湿地が形成される機会は、ほとんどなくなっています。その一方で現在ある湿地は、遷移の進行により、どんどん消滅していきます。

遷移の進行は、それ自体は自然現象です。湿地が消えるのは、自然の成り行きだといってもよいでしょう。しかし、新しい湿地を生成させなくする一方で今ある湿地が消えるのは自然だというのは、そのような場所に生育している植物たちにとって、ずいぶん酷な話だと思います。治山事業は人間の生活に直結することでやめるわけにはいきませんから、彼等の存続を確保するためには、どうにかして現在ある湿地の遷移の進行を抑え、湿地を現在のままの状態に保たなければならないでしょう。ところが、湿地は踏み荒らしに弱い脆弱な環境です。多人数で保全活動を行ったら、本人たちは保全しているつもりでも、湿地環境はたちまち崩壊してしまいます。できるだけ少人数で、可能な限り効率よく行わなければならないのですが、これはなかなか難しいことです。

また愛知県では、湧水湿地以外にも谷戸田の周辺などにそれよりはやや富栄養な湿地が形成されていて、そこにもさまざまな植物が生育していました。代表的な種類としては、又マトラノオ、サウギキョウなどがあります。しかしそのような湿地も次第に消滅してきています。保全が必要な場所を絞り込むためにも、湿地性植物の現在の分布状況を把握しておくことは重要だと思われます。県レッドデータブック掲載種についてはもちろん分布状況の把握

が必要ですが、それに加えて、ここで指標種として取り上げた種類についても、情報の蓄積が必要です。

既に活動が行われている場所でもモニタリング調査を企画する場合にも、それぞれの場所でその特性に合わせて選定している種類に加えて、これらの指標種も調査の対象にしてほしいと思います。また、モニタリング調査は基本的に同一人（またはグループ）が調査するはずですので、その場合はあるなし情報に加えて、ある程度の量的な記録を取るほうがよいでしょう。

なお、ここで調査対象とする植物のうち、レッドデータブック掲載種やミミカキグサ、ホザキノミミカキグサなどについては、位置情報をどこまで明らかにするか、慎重な配慮が必要です。皆様から頂いた調査結果を公表する際には一定のマスキングを行う予定ですので、その点はご了承ください。



(犬山市, 2004-5-29, 芹沢俊介)

#### 春の湧水湿地

典型的な湧水湿地では、腐植質の堆積が少なく、湿地の中央部はこの写真のように裸地状になっています。しかし遷移が進行すると湿地は草でおおわれ、さらに時間が経つと低木が侵入し、やがて湿地は森林にのみ込まれます。

調査テーマ  
①  
②  
③  
④  
⑤  
⑥  
⑦  
⑧  
⑨  
⑩  
⑪  
⑫  
⑬  
⑭  
⑮

調査しやすい月  
3  
4  
5  
6  
7  
8  
9  
10  
11  
12  
1  
2



花はまばらにつく

(春日井市, 1996-9-5, 芹沢俊介)

# ミズギボウシ

単子葉類 キジカクシ科  
*Hosta longissima* Honda ex F.Maek.

## はな ほそ は まばらに花をつける細い葉のギボウシ

細い葉のギボウシ。ギボウシの仲間としてはあまり見栄えがしない種類ですが、このあたりの湿地を特徴付ける植物の一つです。湿地の中では日当たりのよい場所から薄暗い湧水のある林床までさまざまな場所に生育しており、6月末から咲き始める集団もあれば、8月下旬に咲き始める集団もあります。花がまばらにつくことがよい特徴です。果実はよく形成されません。コバギボウシは葉がやや幅広く、花がより多く、また密につく種類で、全国的に見れば普通種ですが、愛知県ではそれほど多くありません。

### 【形態】

多年生草本。根茎は横に這うか斜上する。葉は5~10枚束生し(ただし花時には1~2枚しか残っていない場合もある)、線形~線状楕円形、小型のものは長さ5cm、幅6mm程度であるが、大型のものは長さ65cm、幅2.8cmに達する。花茎は高さ35~100cm、上部に2~10個の花をまばらにつける。花は長さ3.5cmに達しないものから5cmを越すものまであり、花被の広筒部は次第に太くなり、円錐形に近くなることが多い。

### 【分布と生態】

本州(静岡県西部~山口県)と四国、九州の一部に分布する。愛知県では尾張と西三河には多いが、東三河ではやや少ない。

### 【よく似た種】

稀にコバギボウシとの雑種が見られる。

### 【撮影のポイント】

できれば葉の形状もわかるように写す。

## 【形態】

茎は叢生してほぼ直立し、高さ30～65cm、時に85cmに達する。葉は細く、幅1～2mmである。花は6月下旬から咲き始め10月まで見られるが、目立つのは8～9月、花序は茎の先端に1～3個集まってつき、その他に離れて1～2個つくことが多く、小穂は披針形、長さ5～6mm、やや赤褐色を帯びた白色である。

## 【分布と生態】

北半球の寒帯～温帯に広く分布し、日本では北海道から九州南部まで生育しているが、本州中部以北に多い。

## 【よく似た種】

同属のイヌノハナヒゲ類は花が褐色なので、識別は容易である。

## 【撮影のポイント】

花部だけを拡大せず、植物全体がわかるように写す。

## 【参考資料】

県GDB①p242



小穂は白色

(春日井市, 1996-9-5, 芹沢俊介)

## ミカツキグサ 単子葉類 カヤツリグサ科

*Rhynchospora alba* (L.) Vahl

### さ ゆうすいしっち はな ひっそりと咲く湧水湿地の花

中型の多年生草本。本来は温帯性の植物ですが、愛知県の湧水湿地には広く生育しています。特に目立つ植物というわけではありませんが、良好な湧水湿地ならたいていの場所に生育しており、その一方で他の環境（例えば休耕田のような場所）にはほとんど出現しないので、湧水湿地の指標種として最も重要なものです。是非とも注意して観察してほしい植物です。カヤツリグサ科ですが花は白色で、同属他種からは容易に見分けることができます。



花序は大きく  
枝分かれする

(長久手市, 2012-8-1, 加藤範夫)

### 【形態】

稈は束生し、高さ 85～180cm になる。葉は稈の下部に集まってつき、葉身は長さ25～80cm、幅5～12mm、裏面は白色を帯びる。花・果期は9～10月、花序は長さ17～50cm、小穂は5～25mmの柄の先につき、長さ7～12mm、淡緑色～紫褐色で、3～6小花からなる。花序の枝や小穂の柄は通常斜開～開出するが、ほとんど開出しないものもある。

### 【分布と生態】

南千島～中国大陸に分布し、国内では北海道～九州に生育するが、寒冷地に多い。

### 【よく似た種】

イネ科植物で一見似たものは多いが、日本では同属の他種はなく、よく見れば識別に迷うことはない。

### 【撮影のポイント】

花部だけを拡大せず、植物全体がわかるように写す。

### 【参考資料】

県 GDB①p.246

## ヌマガヤ 単子葉類 イネ科

*Moliniopsis japonica* (Hack.) Hayata

きら じつ じゅうよう  
嫌われることもあるが実は重要

大形の多年生草本。本来は温帯性の植物ですが、愛知県の湧水湿地周辺には広く生育しています。多少被陰された場所にも見られます。良好な湧水湿地ならたいていの場所に生育しており、その一方で他の環境にはほとんど出現しないので、湧水湿地の指標種としてミカヅキグサと共に最も重要です。湧水湿地では多少遷移が進んだ場所に出現し、大形で他の植物を被覆してしまうので嫌われることがありますが、本当は本種自体貴重な温帯性植物です。「本種が消えたら湧水湿地の植物は全滅」という意味でも、注目してよい植物です。

## 【形 態】

多年生草本。横にはう地下茎がある。地上茎は直立し、高さ50～100cm、分枝しないか上部で短い枝を出す。葉は多数が互生し、葉身は線状楕円形～倒披針形、長さ4～7cm、幅1～2cm、先端は鈍頭～鋭頭、基部は狭まってほとんど無柄である。花期は6月下旬～8月上旬、花序は長さ10～20cmで直立し、花をややまばらにつける。花は長さ3～6mmの柄があり、花冠は白色で5裂し、直径5～9mm、裂片は倒卵形である。

## 【分布と生態】

日本～インドシナに分布し、国内では本州～九州に生育している。愛知県では山地の一部から丘陵地にかけて比較的多く見られるが、平野部では稀である。

## 【撮影のポイント】

花部だけを拡大せず、植物全体がわかるように写す。

## 【参考資料】

県 GDB①p.282



花序は直立する

(長久手市, 2012-7-13, 加藤範夫)

## ヌマトラノオ 真正双子葉類 サクラソウ科

*Lysimachia fortunei* Maxim.

しょか しっち さ しろ はな  
初夏の湿地に咲く白い花

湿った草地に生育する多年生草本。花序は直立し、花はまばらにつきま。愛知県では湧水湿地の周辺部に多く見られますが、時には平野部の水田の周辺のような低湿地的環境が残存した場所にも生育しています。ただし大河川の河川敷には生育していません。トウカイコモウセンゴケなどが生える湧水湿地と、マツカサススキやマコモが生える低湿地の中間的な環境を指標する植物です。同じ仲間のオカトラノオは林縁などの草地に生え、花穂の先が横に傾きます。



葉は長い  
柄がある

(豊橋市, 2007-7-8, 加藤範夫)

## モウセンゴケ 真正双子葉類 モウセンゴケ科

*Drosera rotundifolia* L.

は せんもう むし と しょくちゅうしょくぶつ  
葉の腺毛で虫を捕らえる食虫植物

食虫性の多年生草本。葉に腺毛があり、付着した虫を消化します。痩せた土地で、栄養分を補うため発達した性質だと言われています。本来は温帯性の植物ですが、愛知県では丘陵地にも広く分布しています。路傍の水のしみ出す崖地などにも見られますが、主要な生育地は湧水湿地です。湧水湿地の中では、次種トウカイコモウセンゴケに比べて、より水位の高い場所に生育しています。貧栄養の場所に生育する代表的な植物として、注目すべきものです。

### 【形態】

食虫性の多年生草本。葉は根生し、長さ3~8cmの柄があり、葉身は倒卵状円形、長さ7~10mm、基部は柄に流れ、表面と辺縁に昆虫類を捕らえるための腺毛がある。花期は6~8月、高さ10~30cmの花茎の上部に総状花序をつけ、花序の先端は渦巻き状に巻く。花は5~20個が花序の片側につき、花弁は長さ4~6mm、通常白色であるが、稀に淡紅色のものもある。

### 【分布と生態】

北半球の亜寒帯~温帯に広く分布し、日本では北海道~九州に生育している。

### 【よく似た種】

トウカイコモウセンゴケ(次頁)は葉柄が短く、花は淡紅色である。

### 【撮影のポイント】

トウカイコモウセンゴケと共に、葉の状態がわかるように写す。

### 【参考資料】

県 GDB①p.276



葉の柄は  
短い



花

トウカイコモウセンゴケ 真正双子葉類 モウセンゴケ科  
*Drosera tokaiensis* (Komiya et C. Shibata) T. Nakam. et K. Ueda

(長久手市, 2017-6-6, 星野智司)

あいちけんしゅうへん しっち こゆうしゆ  
**愛知県周辺の湿地の固有種**

【形態】

多年生草本。葉は直径2.5~5.5cmのロゼット状になる。各葉はさじ形で葉柄と葉身がある程度区別でき、葉身は倒卵形、長さ5~10mm、表面と辺縁に帯紅色の腺毛がある。花茎は長さ8~30cm、上部に淡紅色の花をつける。花は5月中旬頃から咲き、残花は秋まで見られる。直径3~4mm、雄ずいは4本である。

【分布と生態】

日本固有種で、東海地方、近畿地方、四国に分布する。水がしみ出す土手や崖地に生育していることもある。

【よく似た種】

コモウセンゴケは本種の片親と推定される4倍体種で、葉はへら形、葉柄と葉身の区別がはっきりしない。愛知県では知多半島と豊明市に分布する。

【参考資料】

県 GDB①p277

湧水湿地のやや乾いた場所に生育する食虫植物。温帯系のモウセンゴケと熱帯系のコモウセンゴケとの交雑に由来する6倍体種で、東海地方から四国にかけての比較的狭い範囲だけに生育しています。愛知県ではそれほど少ないものではありませんが、本地域の湿地を特徴付ける植物の一つで、その意味でとても重要です。

モウセンゴケが湿地の中央部の湿った部分に多いのに対し、本種はやや乾いた場所に生育しています。丘陵地の湿地には広く見られますが、山地には生育していません。

調査  
テ  
ー  
マ

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩
- ⑪
- ⑫
- ⑬
- ⑭
- ⑮

調査  
し  
や  
す  
い  
月

- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 1
- 2

果実は  
黒く熟す

## クロミノニシゴリ

真正双子葉類 ハイノキ科  
*Symplocos paniculata* (Thunb.) Miq.

(豊橋市, 2008-5-25, 加藤範夫)

しっち めだ ていほく  
湿地のまわりで目立つ低木

### 【形態】

葉は互生し、4~10mmの柄があり、葉身は楕円形~長楕円形、長さ3~9cm、表面は鮮緑色でやや光沢がある。葉縁の鋸歯は低く、時にはほとんど全縁に見える。花期は5~6月。新枝の先の円錐花序に多数の花をつける。花は白色、直径8~10mm、花冠は5裂して平開する。果実は卵球形、長さ6~7mm、黒熟する。

### 【分布と生態】

日本固有種で、本州中部に分布する。

### 【よく似た種】

サワフタギに似るが、葉縁の鋸歯が低く表面にやや光沢があること、花つきがよいことなどで区別できる。三河山地には、葉縁の鋸歯が鋭くて果実が藍黒色に熟すタンナサワフタギも生育している。

### 【参考資料】

県 GDB①p.283

高さ5mくらいになる落葉性の低木。湧水湿地の周辺部や湧水のあるため池の周辺に生育し、枝いっぱい白い花をつけるため、開花期にはよく目立ちます。愛知県では現在のところまだ個体数が多く、レッドデータブックに掲載されるほどの状態にはなっていません。しかし東海地方から近畿地方にかけての比較的狭い範囲だけに分布する準固有の、しかも木本植物なので、是非とも注意して観察してほしいと思います。まとまった数が見られる場所は、できれば保全しておきたいものです。



(長久手市, 2013-4-4, 星野智司)

## ハルリンドウ 真正双子葉類 リンドウ科

*Gentiana thunbergii* (G. Don) Griseb.

し っ ち は る つ あ お は な  
**湿地に春を告げる青い花**

### 【形態】

茎は高さ 5~23cm、やせた個体ではほとんど分枝しないが、よく発育した個体では基部で分岐して叢生する。茎の基部数対の葉は比較的大型で、節間がつまってロゼット状になり、広卵形~広披針形、長さ 4.5cm、幅 2cm に達する。花は低地では 3 月末から咲き始め、山間部では 5 月中旬まで見られる。花冠は長さ、直径とも 2~3cm、5 裂して、各裂片の間にも小さい突起があり、通常青紫色であるが、白いもの(シロバナハルリンドウ)や淡紅紫色のものもある。

### 【分布と生態】

本州~九州、朝鮮半島、中国大陸に分布する。平野部には見られない。

### 【撮影上の注意】

小型の植物なので、撮影時にまわりの植物を踏み荒らさないよう注意してほしい。

### 【参考資料】

県 GDB①p.293

日当たりのよい湿地に生育する小型の越年生草本。春早く青紫色の花を咲かせます。花は晴れた日の日中だけ開き、曇りの日や夕方には閉じてしまいます。

全国的にはやや稀少な植物ですが、本地域では湧水湿地の春を飾る代表的な花となっています。尾張や西三河の丘陵地ではあちこちに見られ、典型的な湧水湿地だけでなく、山間の水田のあぜ道や、やや湿った草地等にも生育しています。しかし東三河北部には分布しておらず、豊橋市南部から渥美半島にかけてもあまり多くありません。

調査  
テ  
ー  
マ

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- ⑧
- ⑨
- ⑩
- ⑪
- ⑫
- ⑬
- ⑭
- ⑮

調査  
し  
や  
す  
い  
月

- 3
- 4
- 5
- 6
- 7
- 8
- 9
- 10
- 11
- 12
- 1
- 2



花後のがくは  
耳かき状

(豊田市, 2007-8-12, 加藤範夫)

## ミミカキグサ 真正双子葉類 タヌキモ科 *Utricularia bifida* L.

きいろ はな しょくちゅうしょくぶつ  
黄色の花の食虫植物

主として湧水湿地の裸地状の部分に生育する小型の多年生草本。食虫植物ですが、捕虫のうは地中につくため、あまり目立ちませんが、葉はごく小さく、そのため花茎が伸びなければとても見つかりませんが、裸地状の場所に生えるため、花が咲けば割合確認しやすい植物です。湧水湿地ならたいいてい場所に見られますが、他の草が茂ると消えてしまいます。遷移初期の湧水湿地の指標種として重要ですが、ため池の岸などに生育することもあります。名前は、花後大きくなったがくが耳かきのようだからです。

### 【形態】

葉は線形、長さは柄を除いて3～8mmである。花茎は直立し、小型のものは3～4cmにすぎないが、大型のものでは20cm以上になり、上部に2～8花をつける。花は早い場所では6月下旬から咲きはじめるが、多くは8～10月に咲き、黄色、1～3mmの柄の先につき、距を除いて長さ3.5～6mm、距は長さ2～5mmで斜め後方に伸び、多少下方に曲がる。がくは花後二枚貝状に伸び、長さ4～5mmになる。

### 【分布と生態】

日本(本州以南)からインド、オーストラリアまで広く分布する。愛知県では丘陵地に多く、山地の一部にも生育している。

### 【撮影上の注意】

小型の植物なので、この写真程度に拡大して写すとよい。撮影時にまわりの植物を踏み荒らさないよう、特に注意してほしい。

## 【 形 態 】

葉はへら形～長楕円形、長さは柄を除いて3～6mmである。花茎は直立し、小型のものでは3～5cmにすぎないが大型のものでは35cm以上になり、上部に1～13花をつける。花は7月下旬～10月に咲き、通常淡紫色、ごく稀に白色、ほとんど無柄で、距を除いて長さ4～5mm、距は長さ3～6mmで前方に伸びる。稀に花が白いもの(シロバナホザキミカキグサ)も見られる。

## 【 分布と生態 】

日本(北海道以南)から中国大陸、インドにかけて分布する。愛知県の丘陵地では、どの湿地にもほとんど生育している。山地の一部にも見られる。

## 【 撮影上の注意 】

小型の植物なので、できればこの写真程度に拡大して写すとよい。撮影時にまわりの植物を踏み荒らさないよう、特に注意してほしい。



花後のがくは  
耳かき状に  
ならない

(長久手市, 2012-7-30, 加藤範夫)

# ホザキノミミカキグサ 真正双子葉類 タヌキモ科

*Utricularia caerulea* L.

むらさきいろ はな しょくちゅうしょくぶつ

## うす紫色の花の食虫植物

本種も湧水湿地の裸地状の部分に生育する多年生草本。食虫植物ですが、ミミカキグサと同様捕虫のうは地中につくため、あまり目立ちません。ミミカキグサに比べるとやや大型で、花茎はよく育ったものでは長さ35cm以上になりますが、いくら大きくなっても所詮は小型の植物、他の草が茂るとやはり消えてしまいます。ミミカキグサと共に、遷移初期の湧水湿地の指標種として重要です。花後のがくはあまり大きくならず、耳かき状にはなりません。



葉は多数が  
互生

(犬山市, 2002-9-15, 芹沢俊介)

## サワギキョウ 真正双子葉類 キキョウ科

*Lobelia sessilifolia* Lamb.

あき しゅっち かざ はな  
秋の湿地を飾る花

秋の湿地を飾る植物の一つで、茎は高く伸び、紫色の花をつけます。一昔前まではあちこちにありましたが、近年次第に減少しています。ただし本種は花が美しいため、本来生育していなかった場所に植え込まれることがあります。けれどもこのような行為は、その場所の本来の自然を攪乱だけでなく、生物の分布情報を混乱させ、どれが保全すべき自然か、わからなくしてしまいます。「ない」というのも生物多様性の一つで、何かを付け加えるのはその「ない」状態を失わせる自然破壊行為。このことを忘れてはなりません。

### 【形態】

多年生草本。茎は分枝せず、高さ 70～120cm になる。葉は多数が互生し、披針形で長さ 4～7cm、辺縁には低い鋭鋸歯がある。花期は 8～9 月、上部の葉がしだいに小型となって長い総状花序に移行する。花には 5～12mm の柄があり、花冠は唇形で濃紫色、長さ 2.5～3cm、上唇は 2 深裂、下唇は 3 浅裂し、裂片の縁に長毛がある。さく果は球形で、長さ 8～10mm になる。

### 【分布と生態】

カムチャッカから中国大陸、シベリア東部にかけて分布し、国内では北海道～九州に生育している。愛知県では、溜池の周辺や湧水湿地下部の泥質の場所に生育していることが多い。

### 【撮影のポイント】

花 1 個だけを拡大せず、ある程度植物全体がわかるように写すとよい。

### 【参考資料】

県 GDB①p.300

## 【形態】

茎は高さ 70～120cm、無毛のものが多く、白毛を生じる個体もある。葉は長楕円形～線状狭披針形、茎の下部のものは通常長柄があり、柄を除いて長さ 7～20cm、幅 1～2.5cm、花は通常 7 月下旬～10 月上旬に咲き、頭花は直径 2～3cm である。

## 【分布と生態】

本州～九州に分布する。愛知県では丘陵地だけでなく山地にも生育している。東三河の蛇紋岩地には、全体に小型で地下茎があまり伸びない、シブカワシロギクに近い型が生育している。

## 【よく似た種】

花だけを見ればシラヤマギクがやや似ているが、やや乾いた林縁などに生え、葉も卵形なので、識別は容易である。

## 【撮影のポイント】

できれば花部だけでなく、葉の部分も含めて写すとよい。



葉は細長い

(岡崎市, 2013-9-20, 星野智司)

## サワシロギク 真正双子葉類 キク科

*Aster rugulosus* Maxim.

しっちは ほそ  
湿地に生える葉の細いノギク

多年生草本。地下茎は長くはいます。湿地の林縁など他の草がやや多い場所に、たいていは小群落をつくって生育しています。茎は直立して上部でまばらに分枝し、葉は細く、やや硬くてざらつき、辺縁はまばらに小さい鋸歯があるだけで、しばしばほとんど全縁に見えます。花ははじめ白色ですが、後に紅紫色になります。愛知県では、あちこちの湿地に見られる種類です。ノギクの仲間ですが葉が細く、他の種類からは容易に見分けることができます。